

(文化財保護シンボルマーク)

富山県大門町

二口油免遺跡第Ⅱ次発掘調査概報

—土地区画整備事業に係る調査—

1998年3月

大門町教育委員会

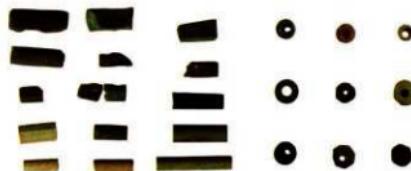
二口油免遺跡第Ⅱ次発掘調査概報

1 9 9 8

巻頭図版



1.SB09（真上から）



2.SH403出土 碧玉製管玉、同穿孔状況



3.SX188出土翡翠未製品・SH403出土翡翠未製品（上段・表 下段・裏）

序

大門町は、岐阜山中に流れを発する庄川の最下流右岸に位置し、東西交通の要衝として発展し、また豊かな田園地帯を有する「都鄙融合のまち」であります。

この美しいまちを次の世代に伝えていくために、私たちはここで暮らしてきた祖先の足跡を学ばなければなりません。そしてまた次の世代に伝えて行くことは私たちの義務であり、郷土を愛する心を育むことでしょう。

二口油免遺跡は近年の調査により、大規模なそして非常に重要な遺跡になることが明らかになりつつあります。

今回の調査では、弥生時代から古墳時代への過渡期の良好な資料を得ることができました。これらは、北陸地方ならず、古代国家の成立過程を探るうえでも重要な鍵となる資料です。

本書が、今後の調査研究と文化財保護、そして郷土の歴史に触れる一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査に終始ご協力いただきました地元の皆様、関係者各位に深く感謝の意を表します。

平成10年3月

大門町教育委員会
教育長 野上 和雄

例　　言

1. 本書は富山県射水郡大門町二口に所在する二口油免遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査は二口土地区画整理事業 平成9年度富山県臨時土地区画整理交付金事業補助金（Aタイプ）・平成9年度富山県土地区画整理交付金事業補助金（地方特定道路）に伴い、大門町二口土地区画整理組合と委託契約を結び、大門町教育委員会が実施した。
3. 調査期間は平成9年7月10日～平成10年3月19日、面積は4,000m²である。
4. 調査は大門町教育委員会が実施した。調査は大門町教育委員会 主事 尾野寺克実、同 調査員 中井英策が担当した。
5. 本書の執筆、編集は中井がおこなった。
6. 発掘調査の作業には、大門町シルバー人材センターのご協力を得た。
7. 調査及び、遺物整理・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。
矢村有紀 高田紀美代 布目弥佳
8. 調査を実施するにあたり、大門町二口土地区画整理組合には、多大なご協力を賜った。記して感謝する。
9. 調査期間中及び本書の作成まで、次の方々より有益なご教示を得た。記して感謝の意とする。（順不同、敬称略）
上野章、宮田進一、池野正男、安念幹倫、高梨清志（富山県埋蔵文化財センター）
伊藤隆三、塙田一成、辻谷真夕（小矢部市教育委員会）
山口辰一（高岡市教育委員会）
黒坪一樹（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）

目 次

本文目次

I. 調査地の立地	1	
II. 調査の経緯	1. 調査に至る経過	2
III. 調査の概要		
1. 調査の方法		
2. 調査	3	
第1 トレンチ	5	
第2 トレンチ	13	
第3 トレンチ	16	
IV. まとめ	17	

図版・挿図目次

巻頭図版

1. SB09 (真上から)	
2. SH403出土	
碧玉製管玉、同穿孔状況	
3. SX188出土翡翠未製品	
SH403出土翡翠未製品	
(上段・表下段・裏)	

挿図

第1図 調査地位置図	1
第2図 調査地東から	2
第3図 調査地から大門中学を望む	2
第4図 1 トレンチ検出状況	3
第5図 2 トレンチ作業風景	3
第6図 トレンチ配置(S=1/250)	4
第7図 SD01・02	5
第8図 SB04・SD08	6
第9図 SD08遺構図	7
第10図 SB09遺構図	7
第11図 SB205遺構図	8
第12図 SB34周辺遺構図	8
第13図 SP75・SK76	9
第14図 SB64遺構図	9
第15図 SB169周辺遺構図	10
第16図 SX188遺構図	10
第17図 SH403遺構図	11
第18図 SX408遺構図	11
第19図 SK474遺物出土状況	12
(北東から)	12
第20図 SD1001遺物出土状況	12
(北東から)	12
第21図 遺物出土状況 (真上から)	12
第22図 SD1001遺構図 (S=1/250)	12
第23図 第2トレンチ垂直写真	13
第24図 SX408遺構図 (S=1/400)	14
第25図 SB423・467 (S=1/400)	14
第26図 SK458 (北から)	14

第27図 SE448断面 (北から)	15
第28図 SE448 井筒	15
第29図 SE448 断面実測図	15
第30図 SK458 (北から)	16
第31図 SK458 (北から)	17

図版

遺物実測図

第1 SD02	
No.18,19,22,28,47,50	18
第2 SD1001	
No.58,72,74,75,76,77,78	19
第3 SD1001	
No.62,63,64,66,67,68,70,71,73	20
第4 SD1001	
No.39,60	21
第5 SD08	
No.79,80,81,82,87,88	22
第6 SH403	
No.85,92	23
第7 SH403/SX408/SK474	
No.89,90,91,94,102	24
第8 SK474	
No.98,101,103,104,106	25
第9 SK474	
No.99,100,105	26

遺物写真

第10 SD01/SD02	
No.1~57	27
第11 SD1001	
No.58~59	28
第12 SD1001	
No.60~64	29
第13 SD1001	
No.65~70	30
第14 SD1001	
No.71~78	31
第15 SD08/SK71/SK76	
No.79~84	32
第16 SH403	
No.85~88	33
第17 SH403	
No.89~92	34
第18 SX408	
No.93~97	35
第19 SK474	
No.98~102	36
第20 SK474	
No.103~107	37
第21 SK458	
No.108~109	38

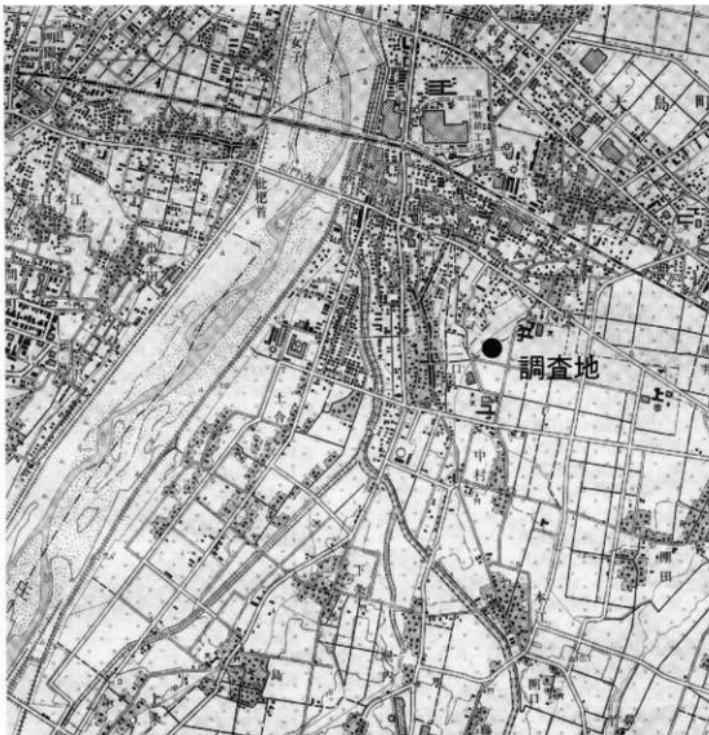
I. 調査地の立地

二口油免遺跡は富山県の庄川下流の右岸に拡がる標高7m前後の田園地帯に立地する。まさに、海岸線から内陸部に入り込む道筋に面していると言えよう。

現在の行政区画で見ると射水郡大島町との境界に接する。

転じて、近景では北にむかって緩やかに標高が下がる平らな地形である。これは昭和9年の庄川の大洪水の後に実施された耕地整理により、旧地形が改変されているらしい。平成8年度の試掘調査では大門小学校西側及び、大門町立体育館西側の試掘トレンチではいわゆるビート層を確認しており庄川の後背湿地であることがよくわかる。標高は現在の九ヶ用水付近を最低とし、また東に行くにつれ緩やかに上昇している。

二口油免遺跡では標高7m付近を境に遺構の検出状況に差が出ている。これは旧地形の影響に因るところが大きい。



第1図 調査地位置図 (S=1/25,000)

II. 調査の経緯

1. 調査に至る経過

この調査は大門町二口地内において土地区画整理事業が実施されることになり、平成7年度の分布調査の結果を基に試掘範囲を設定し、平成8年度の試掘調査を実施した。この試掘調査では大門中学校西側から九ヶ用水までの試掘トレッセにて多数の遺構・遺物を検出したため、協議の結果本調査を実施する事になった。平成9年度の調査は大門緑地公園線の建設に係る、九ヶ用水の東側4000m²が対象である。

III. 調査の概要

1. 調査の方法

調査区の現状は田圃であるため、トレッセ設定後、重機により耕作土の除去を行った。また、一部対象区には区画整理後に、田圃に復旧するところもあることから、耕土の取り扱いを考慮した。また調査対象区内の水路には一部機能しているものもあり、調査の制限されたものもある。

地区的設定は国土座標を標準として一辺10mのメッシュを設定した。X軸に数字をあて、X=80.330mを第5ラインとし、北に10m毎に6・7…と続く、Y軸にはアルファベットを用い、Y=-9.800mをJとして、西から東にL・M…と続ける。また、地区名は東南角杭の名称を地区名とした。

遺構は検出後、遺構の種類に問わらず通し番号をつけ遺構番号とした。従って、調査の進展により他の遺構に吸収され欠番になったものもある。

掘り下げは土層の観察を行い、必要に応じて土層図を作成した。記録は写真撮影を適時行い、実測図はラジコンヘリにより1/200写真撮影から1/50の図面を作成した、また、土層断面図を必要に応じて作成した。



第2図 調査地東から



第3図 調査地から大門中学を望む

2. 調査

調査は平成9年8月より平成10年3月までの5ヵ月間実施した。

最初に1・2トレンチの表土（耕土）を掘削したところ、試掘の結果とおりに東側1トレンチに遺構が多く分布していた。このため、1トレンチの調査から作業を開始した。

二口油免遺跡の遺構はそのほとんどが地山の暗青灰色シルト質粘土の上面で検出された。場所によって、シルト質粘土が砂質に変化し旧流路様な堆積を見せる場所がある、断ち切ったところ砂層は奥深くまで続き、遺物は認められなかった。

第1トレンチ

耕作による搅乱と新旧の遺構の切り合いが複雑であったため検出作業は難航した。下層遺構に弥生時代の竪穴式住居SH403と方形周溝墓SX188、SD02直下のSD1001が確認されていたために、第1回の空撮後、2回目の検出作業を行い、並行して2トレンチの検出、掘削作業を開始した。



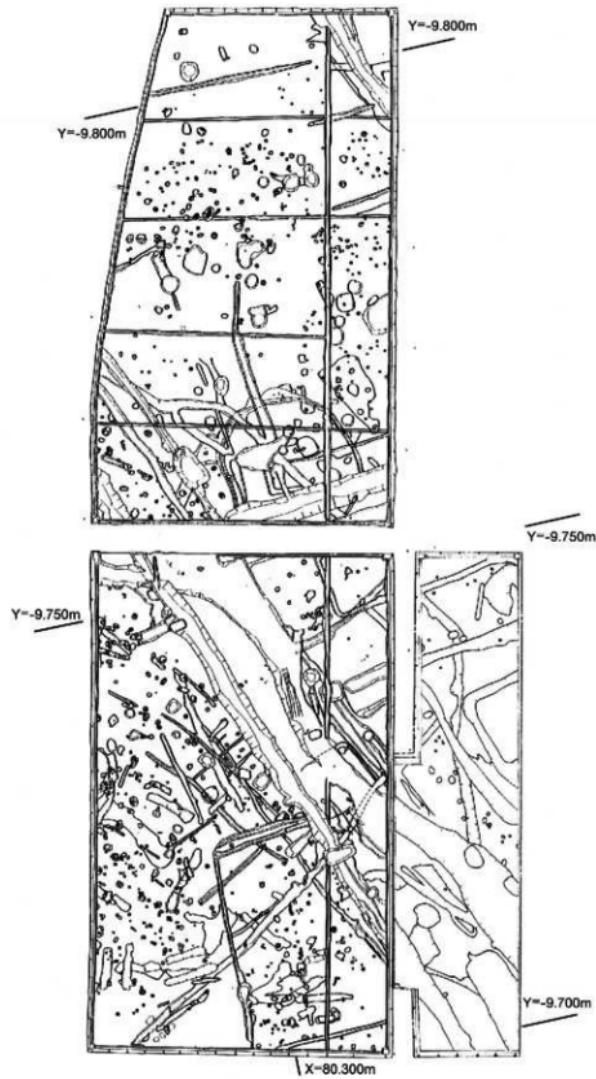
第4図 1トレンチ検出状況

第2トレンチ

現況の地表面が西に行くにつれ下がってくる。このため、耕作によって遺構面が削られており、浅い溝等は部分的に消滅している。遺構の検出は、トレンチ東側で顕著であった。



第5図 2トレンチ作業風景



第6図 トレンチ配置図($S=1/500$)

III. 遺構

今回の調査では総数600に近い遺構が検出された。大別すると近世・中世・古代・弥生に分けられる。

検出された遺構の中には、時期の特定できなかったものも多い。

以下に主要な遺構を述べる。

第1 トレンチ

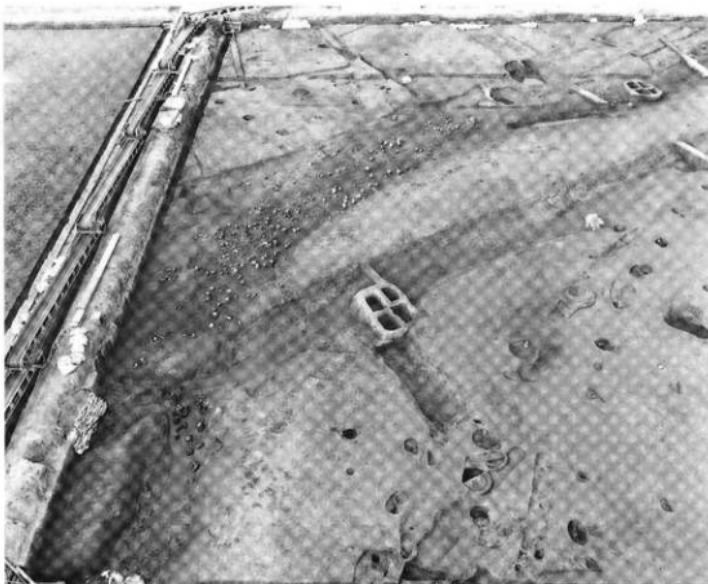
奈良時代以降の建物が6棟確認できた、他に多数の素堀溝や土塹、弥生時代の竪穴式住居、方形周溝墓、摺削を検出した。

SD01

1~3トレンチにまたがって、東西に一直線にのびる溝である。

幅約2m深さ約50cm、検出した長さは約70mである。

蛇行するSD02(SD1001)を切っている。時期は不明であるが、後述するSD02の埋め立てに伴い新たに設けられた溝の可能性が高い。



第7図 SD01・02



第8図 第1トレンチ垂直写真（上が東）

須恵器等が出土しているが、直接造構の時期を反映しているとはものではなく、掘削等による混入と考えられる。

SD02

溝として捉えているが、実体は下層造構のSD1001を整地した整地層と考えられる。断面土層にはSD1001の残欠としての凹部しか認められず、新たに掘削した様子は認められない。完掘した状況では、底面が2・3条の溝条になる。概ね、8世紀に属する須恵器が多数出土している。

SB04

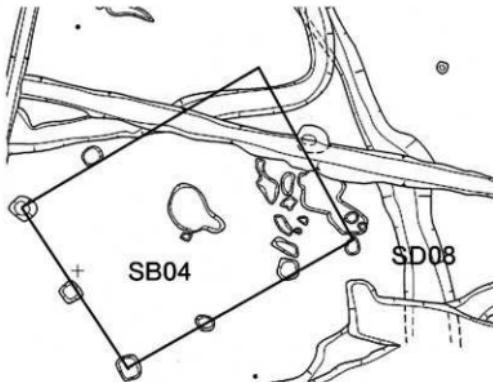
第1トレンチの北西角に位置する、2間(4m)×3間(6m)の堀立柱建物である。

建物中央に土壙が位置する。検出面が砂質土であったので柱穴の輪郭もやや不定形ではあるが隅丸の方形を呈する。深さは浅く、20cmに満たない。

造構に伴う遺物は出土しなかった。

SD08

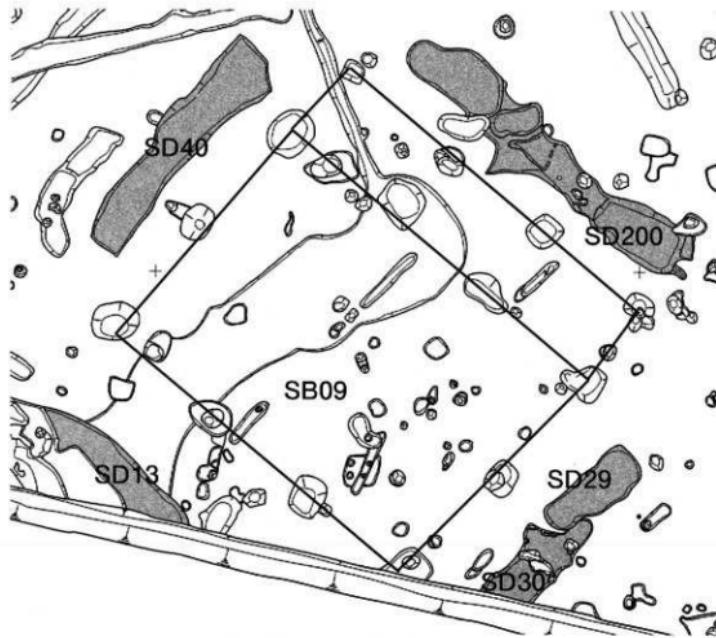
弥生時代の溝である。SD02の下に潜り、SD1001に流れ込む。溝の性格等は不明であるが、2トレンチで検出しているSX408に沿うようなわずかなカーブを描くので関連があるかもしれない。完形の赤彩痕のある短頸壺・擬凹線を施された壺の口縁が出土している。



第9図 SB04・SD08造構図 (S=1/100)



第10図 SD08



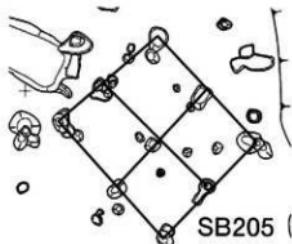
第11図 SB09遺構図 (S=1/100)

SB09

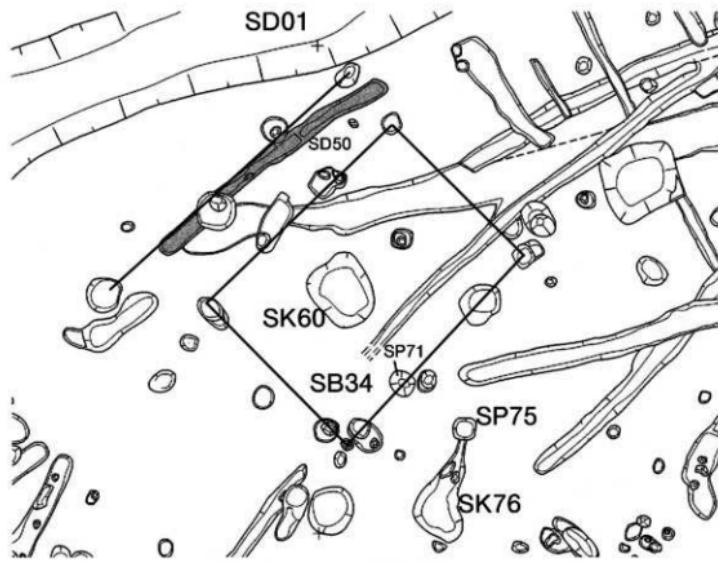
この建物はSD13・SD29・SD40・SD200の溝を四周に巡らし、北東面に庇をつける。2間(6m)×3間(8m)の掘立柱建物である。柱穴の掘方は隅丸方形で最大1mをはかる。またSD200より、横瓶の破片が出土しており、建物の時期は8世紀であろう。

SB205

SB09の東側の隅柱より対角線上1mに位置する。2間(2.8m)×2間(2.8m)の小規模な純柱建物である。あたかもSB09の付属施設を思わせるが、軒が近接しすぎており同時期には存在していないだろう。最低一回の立て替えが認められる。



第12図 SB205遺構図(S=1/100)



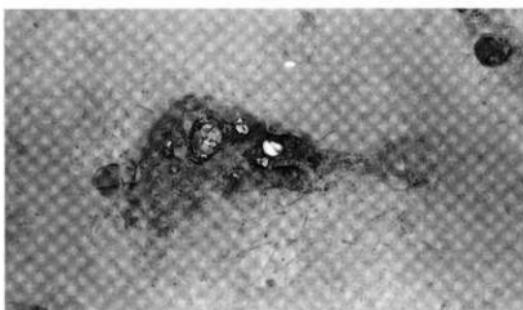
第13図 SB34周辺遺構図 (S=1/100)

SB34

2間(4m)×3間(5.3m)あるいは4間(7m)の建物になると思われる。数度にわたり建て替えているようである。また北西面には庇がつくと思われる。庇の下面には雨落ち溝と思われるSD50がある。建物中央にはSK60があるが建物との関連は不明である。この建物に関連する遺構と思われるSP71から内面に漆の付着した須恵器杯が出土している。

SP75・SK76

SP75は柱穴と思われる。しかし、確実に対応する他の柱穴が見あたらなかつた。これに続くSK76より赤彩の土師器杯が出土した。



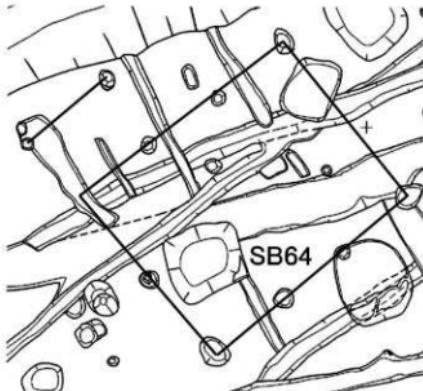
第14図 SP75・SK76

SB64

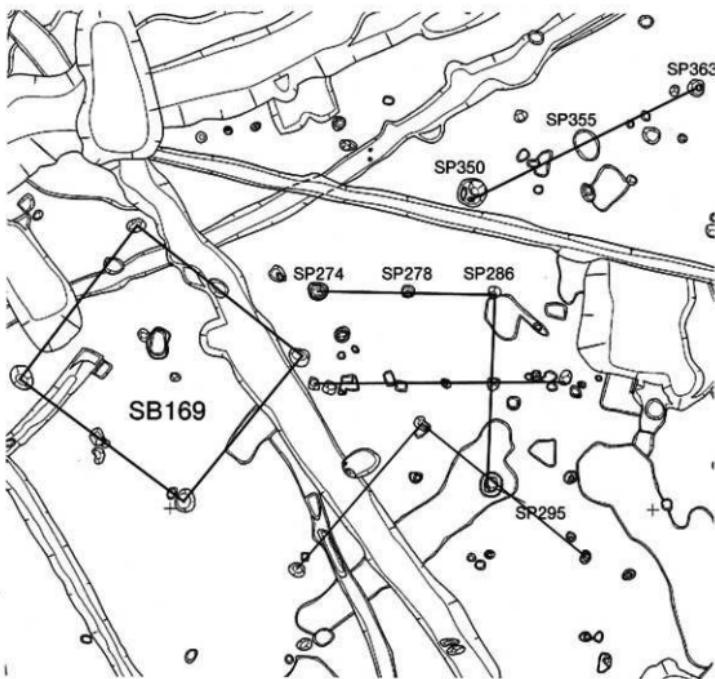
2間(4m)×3間(5.1m)の建物である。SB34と同様建物の南半部に土壤(SX91)が位置する。平面プランもほぼ同じであるため、同時期の建物と思われる。

SB169

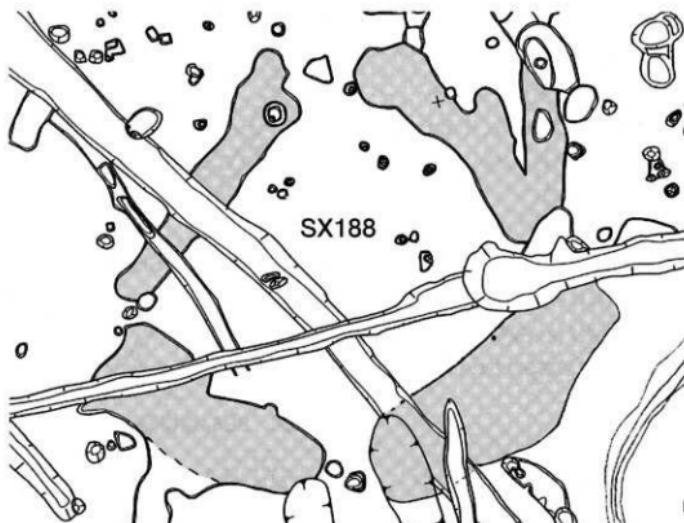
4×4mのほぼ正方形の平面プランをした1間2間の建物である。柱穴に建て替えの跡がみられる。



第15図 SB64遺構図 (S=1/100)



第16図 SB169周辺遺構図 (S=1/100)



第17図 SX188遺構図 (S=1/100)

SX188

旧遺構番号SD185・SD188・SD256・SD311からなる方形周溝墓である。都合、SD188の遺構番号を探り、SX188とした。

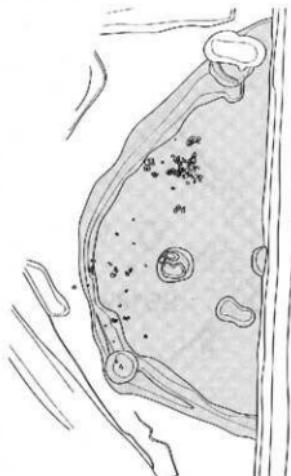
主体部はすでに流出して残っていない。SD188より翡翠の未製品が出土した。

SH403

弥生時代後期の竪穴式住居である。検出したのは約1/2であり、残りは調査地外の道路の下になる。

やや楕円形の平面形であると考えられるが確認を得ない。壁溝の検出にやや乱れがあるので、建て替えをしているかもしれない。通常検出される位置に柱穴は検出できなかった。

この住居跡は玉造工房である。覆土のふるいがけ・洗浄をおこなった。その結果、碧玉の薄片・管玉未製品・完成品・穴を開ける過程で失敗したもの、砥石に使ったと思われる軽石等が出た。また、炭化米も少量出土した。



第18図 SH403遺構図 (S=1/100)

SK474

SH403の南側で検出した。
1.5×1mの土壙である。

SH403の土器よりもやや古い印
象をうける弥生土器が出土してい
る。

また、叩き石等の石器、質の
悪い翡翠原石も出土した。しかし、
碧玉等の薄片は出土していない。
このことから、SH403に先行する
玉造に関係した土壙であろう。

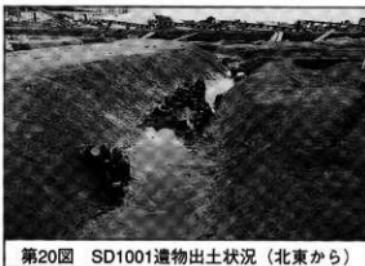


第19図 SK474遺物出土状況

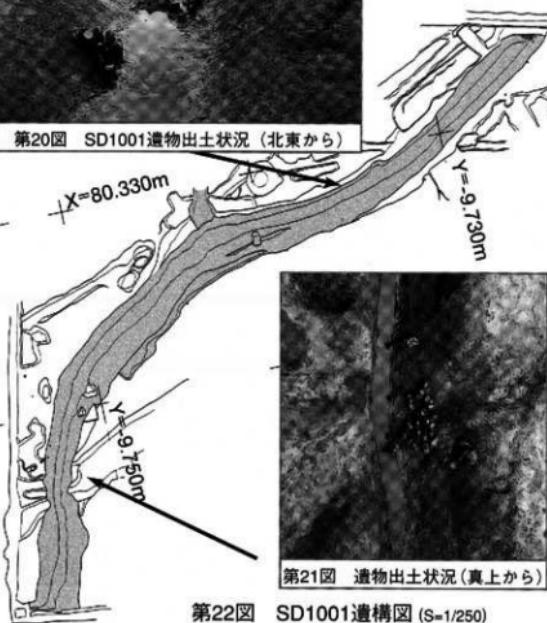
SD1001

弥生時代の掘
割である。断面
は深いV字型で
1トレンチ南西
角から3トレン
チ北側壁に緩や
かに逆S字を描
く。幅約2~2.5m、
深さ約1.5mで大
きく2層に分け
られるが、出土
した土器の時期
にまとまりが無
い。この掘割の
存続年数の長さ
をうかがわせる。

装飾器台・高
杯・小型丸底
壺・翡翠原石・
碧玉片等が出土
している。



第20図 SD1001遺物出土状況（北東から）



第22図 SD1001遺構図 (S=1/250)



第23図 第2トレンチ垂直写真

第2トレンチ

堀立柱建物3棟と弥生時代の溝、土壙。中世の井戸等を検出した。

SX408

直径13~15mの格円形に巡る断面V字形の溝である。弥生時代の住居遺構である可能性が高い。溝は断面が漏斗状に細く深くなることから、板材を打ち込み巡らしたものとも考えられる。大型の赤彩鉢が出土している。



第25図 SB423・467 (S=1/200)



第24図 SX408遺構図 (S=1/200)

SB423・SB467

どちらも2間(4m)×3間(6m)である。この二つの建物は同一方眼上に存在する。建物間にまだ柱穴が存在すると思われるが、他の遺構の影響を受けはっきりしない、かろうじてこの2つのプランを拾い上げることが出来た。

SK458

長軸に1.4m幅1m深さ約40cmの土壙である。二重口縁壺が出土した。SX408よりも新しい時期とおもわれる。

SK459

60×40cmの深さ20cmの土壙である。土師質土器が潰れた状態で出土した。



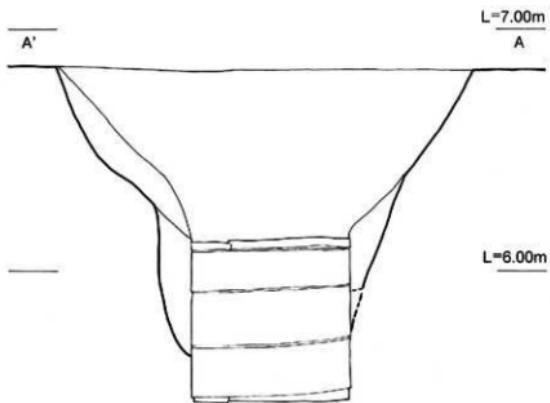
第26図 SK458 (北から)



第27図 SE448断面（北から）



第28図 SE448 井戸側



第29図 SE448 断面実測図 ($S=1/20$)

SE448

曲物を使用した井戸である。検出面から1.4mの深さで底面にあたる。水溜はない。井戸側の下部はシルト質の地山に掘方を持たずにくい込んでいる。よって、井戸側は埋設時の高さをとどめていないと考える。また、曲物に底を留めた形跡がみあたらず、井戸側専用に作られたものであろう。底には挙大の石のみ検出した。

第3トレンチ

SD02の延長を検出した。やや赤褐色粘質土が厚くなる傾向にある。またそれに従って須恵器の出土も少なくなる。

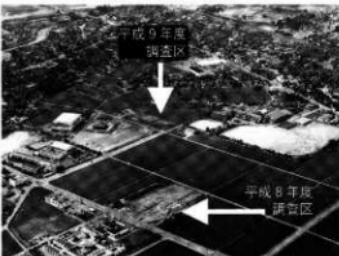
他に覆土の状態から、中世以降のものと思われる方形の区画を検出した。断面W型の溝で区画されるが、3トレンチだけではなく1トレンチ及び2トレンチでも断片的に検出されている。



第30図 第3トレンチ方形区画（北から）

IV.まとめ

今回の調査区では弥生時代後期の溝を検出したが、これが弥生時代の環濠の一部である可能性は非常に高い。注目できる遺物には装飾器台があり、月影期の所産とされ²⁾、石川県漆町遺跡の考察³⁾において、「在地系土器群が払拭され、変わって「畿内系」土器群を始めとする外来系土器群が、在地での土器組成の主体となる時期」³⁾において認められなくなる。」とされている。



第31図 二口油免遺跡全景

のことからも、この溝をとりまく年代が
弥生時代後期⁴⁾まで遡りうることは確実である。また、平成8年度の二口油免遺跡東部の調査において検出された布留式土器を出土する集落・古墳に連なるとすれば弥生時代から古墳時代への過渡期をあらわにするものとして興味深い。

古代の景観も今後の調査により、さらに復元ができるできるであろう。二口油免遺跡は、さらに調査区を広げる予定であり、今後の調査に期待したい。

また、今回調査の遺物については、紙面・整理期間の都合上、遺構別に抜粋し、羅列にとどまったくことをつけ加える。

注

- 1) 横木英道 「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』第5編 石川考古学研究会 1984
 - 2) 田崎明人 「漆町遺跡出土土器の縦断的考察」「漆町遺跡！」石川県立埋蔵文化財センター 1986
 - 3) 注2文献 P141【4溝・7群土器（II型式）の概要】漆町縦年7群に相当する。
 - 4) ここでは庄内並行期を弥生時代とする。
- 谷内翠吾司 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』第5編 石川考古学研究会 1984
横木英道 「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』第5編 石川考古学研究会 1984
田崎明人 「漆町遺跡出土土器の縦断的考察」「漆町遺跡！」石川県立埋蔵文化財センター 1986
田崎明人 他『永町ガノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987

図面・図版

図版
第一
SD02



S=1/3

No.1 SD01 赤彩土師器 (S=1/3)



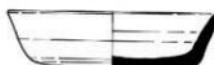
No.22 (S=1/3)



(S=1/3)



No.18 (S=1/3)



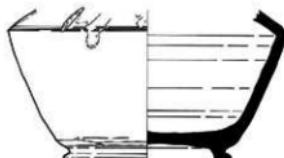
(S=1/3)



No.19 (S=1/3)

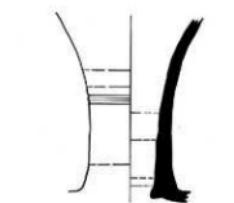


No.28 (S=1/3)



(S=1/3)

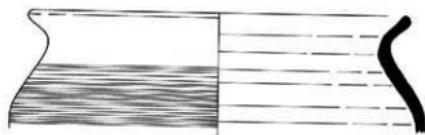
No.47 (S=1/3)



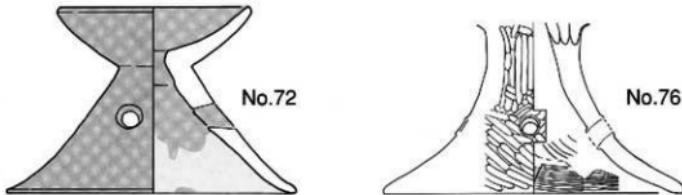
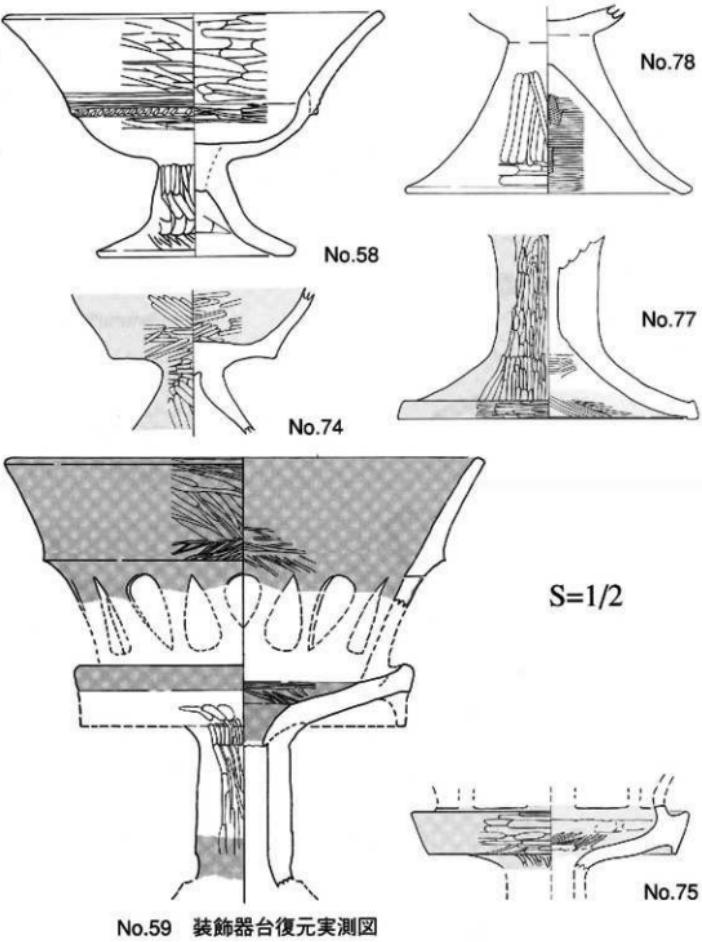
(S=1/3)



No.50 (S=1/3)

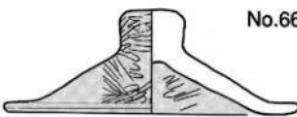


(S=1/3)





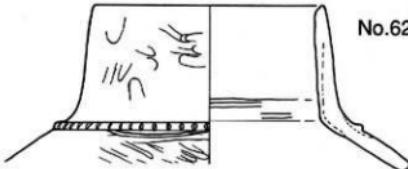
No.67



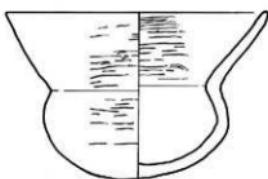
No.66



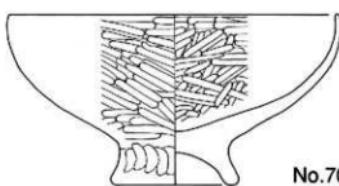
No.63



No.62

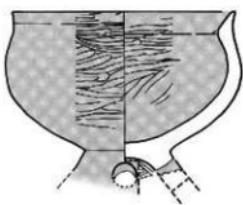
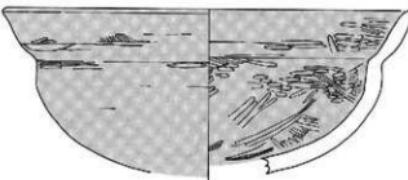


No.64

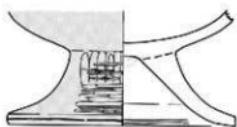


No.70

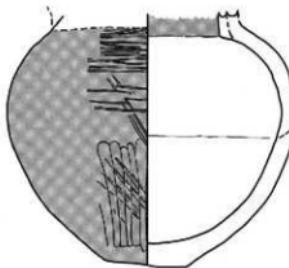
S=1/2



No.71

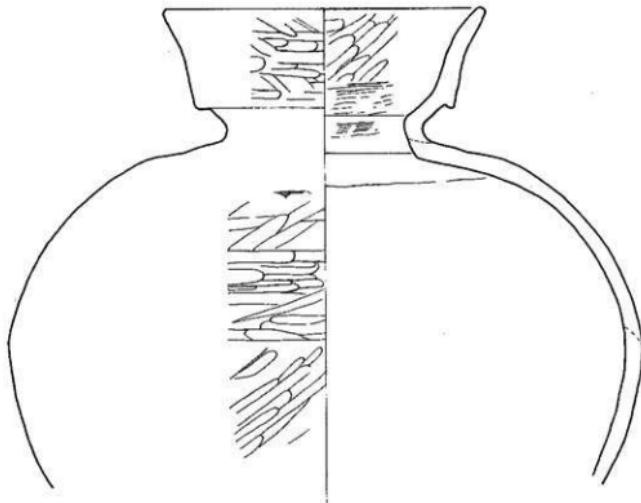
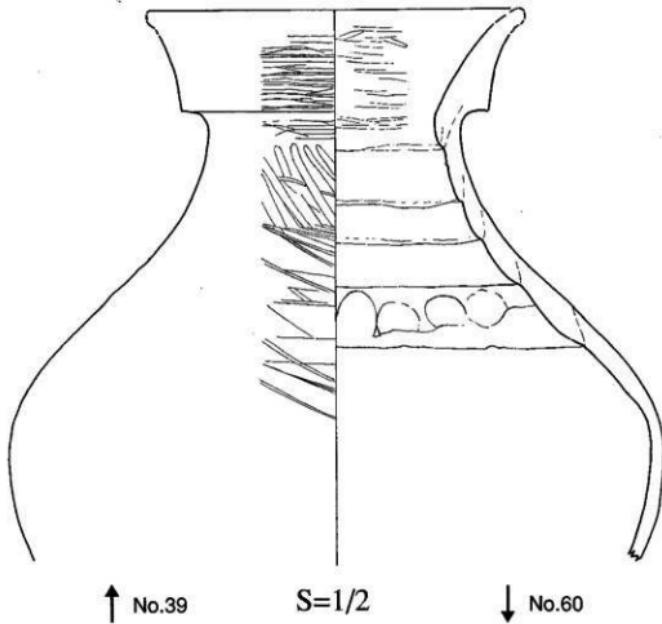


No.73

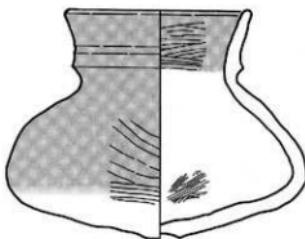


No.68

図版
第四
SD1001



S=1/2

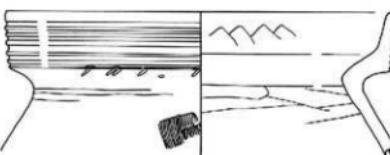


No.79 SD08

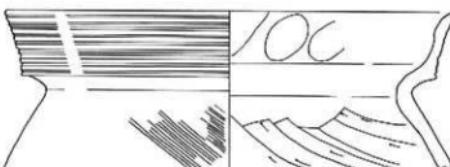
No.80 SD08



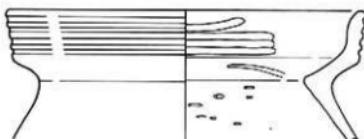
No.82 SD08



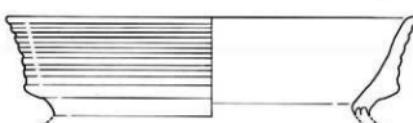
No.81 SD08

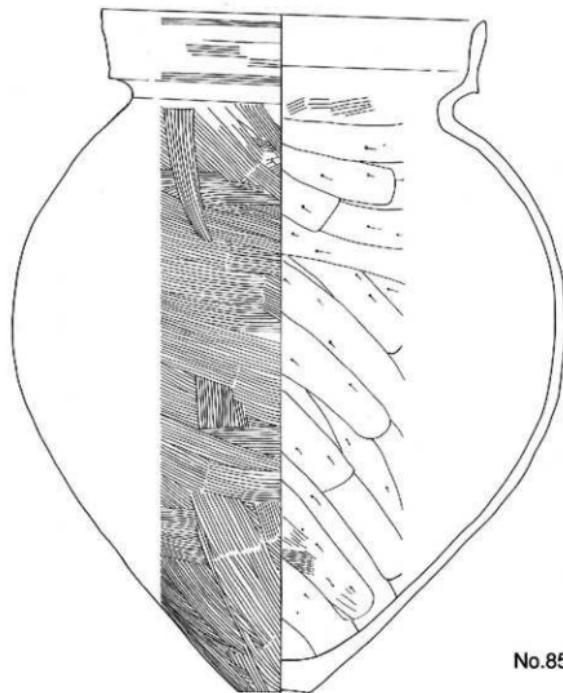


No.87 SH403



No.88 SH403

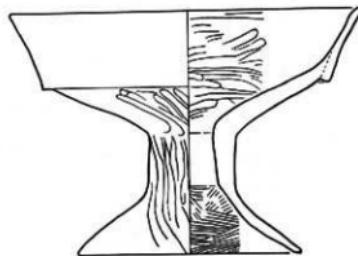




No.85 SH403



No.92 口縁部拓本



No.92 SH403

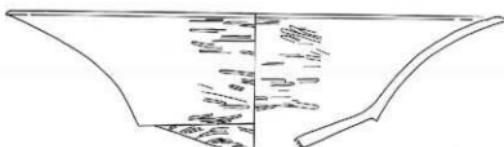
No.90



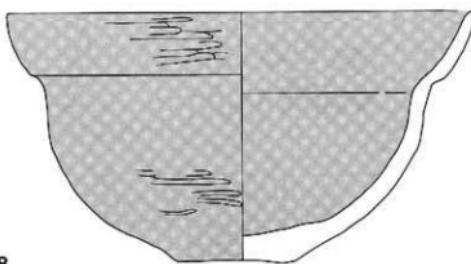
No.91



No.89 (S=1/3)

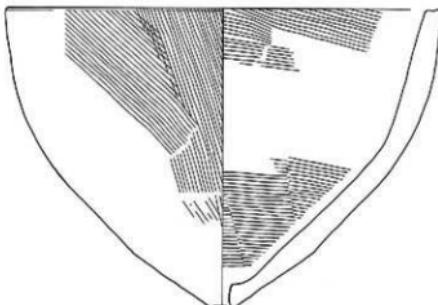


S=1/2

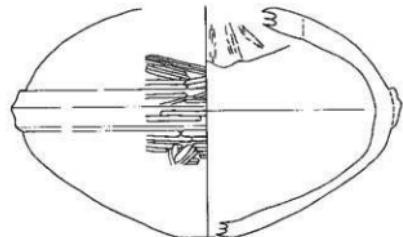


No.94 SX408

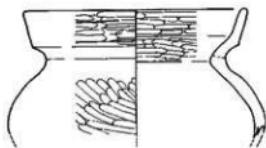
No.102 SK474



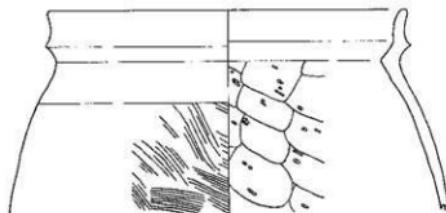
図版
第八
SK
474



No.101 SK474

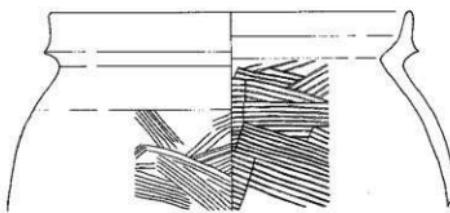


No.106 SK474

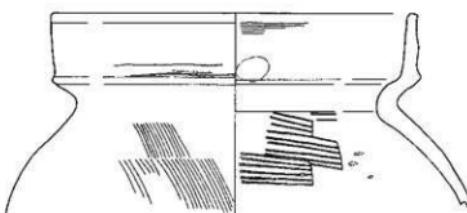


No.103 SK474

S=1/2

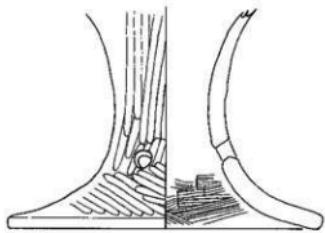


No.104 SK474

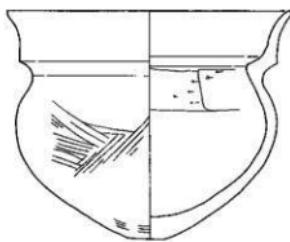


No.98 SK474

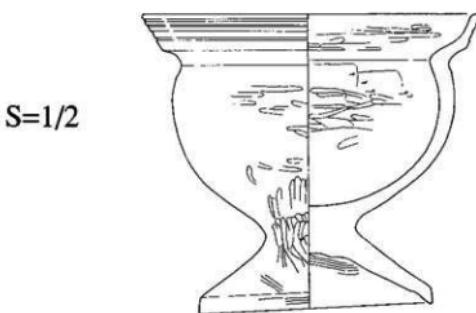
図版
第九
SK474



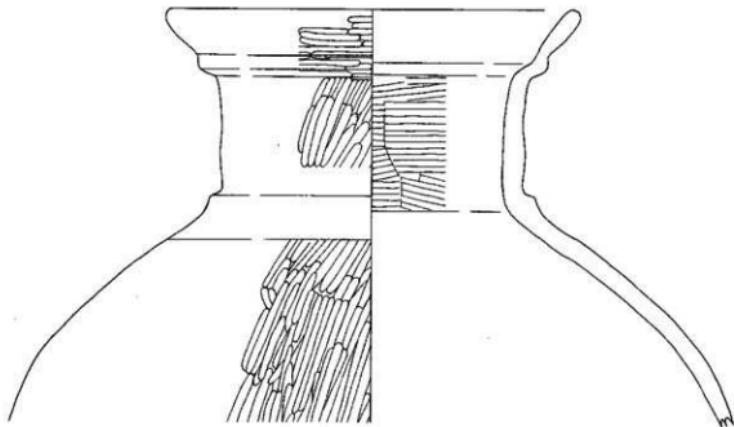
No.105 SK474



No.100 SK474



S=1/2
No.99 SK474



SK474

圖版

第十

SD02

No.1 SD01 出土遺物



SD01 出土遺物

- | |
|---------------|
| 2 . 3 . 4 |
| 5 . 6 . 7 . 8 |
| 9 . 10 . 11 |
| 12 . 13 . 14 |



SD02 出土遺物

- | |
|------------|
| 15. 16. 17 |
| 18. 19. 20 |
| 21. 22. 23 |
| 24. 25. 26 |



SD02 出土遺物

- | |
|----------------|
| 27. 28. 29. 30 |
| 31. 32. 33. 34 |
| 35. 36. 37. 38 |
| 39. 40. 41. 42 |
| 43. 44. 45. 46 |
-
- | |
|----------------|
| 47. 48. 49. 50 |
| 51. . 52. 53 |
| 54. 55. 56. 57 |



SD02 出土遺物

図版 第十一 SD1001



No.58



No.59

図版
第十二 SD1001



No.60



No.61



No.62

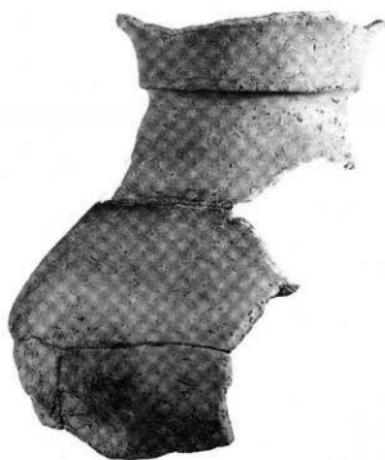


No.63



No.64

図版
第十三 SD1001



No.65



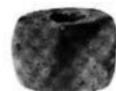
No.66



No.67



No.68

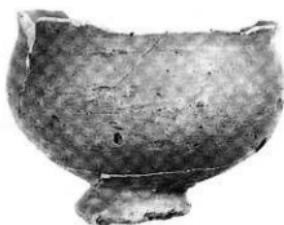


No.69



No.70

図版
第十四
SD1001



No.71



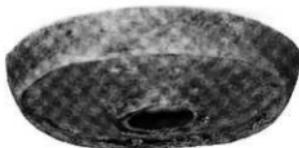
No.72



No.73



No.74



No.75



No.76



No.77



No.78

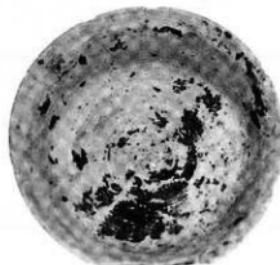
圖版
第十五
SD08



No.79 SD08

SK71・SK76

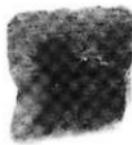
内部漆皮膜狀況



No.80 SD08



No.81 SD08



No.82 SD08

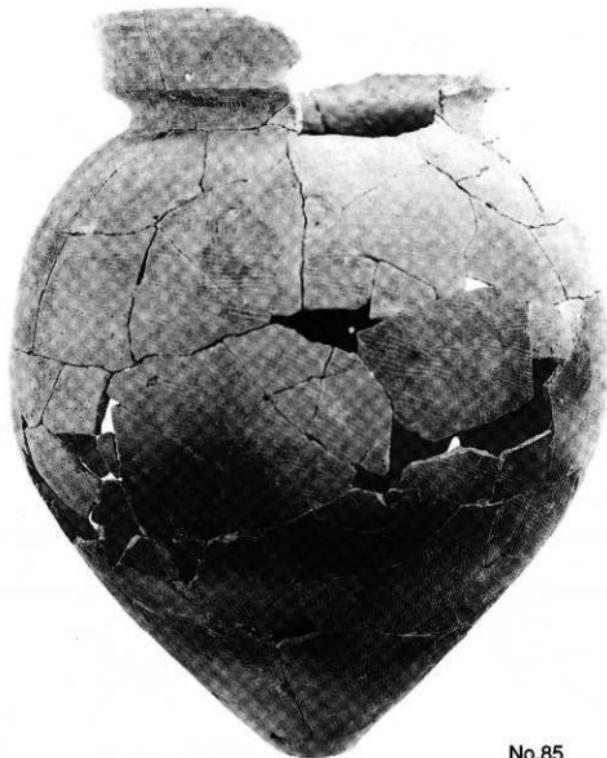


No.83 SK71



No.84 SK76

図版
第十六 SH403



No.85



No.86



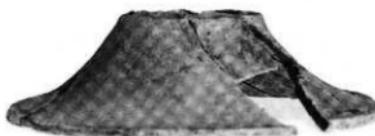
No.87



No.88



No.89



No.90



No.91

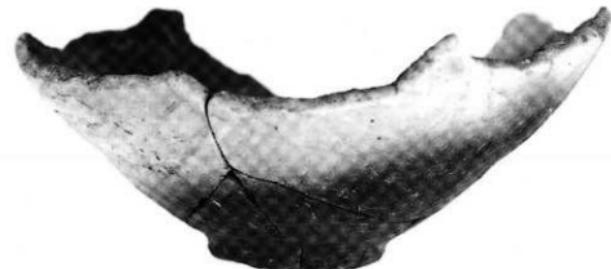


No.92

図版

第十八

SX408



No.93



No.94

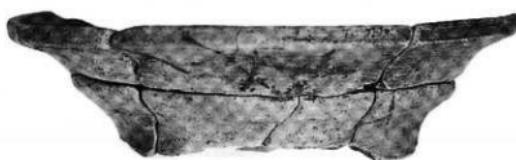
SK474



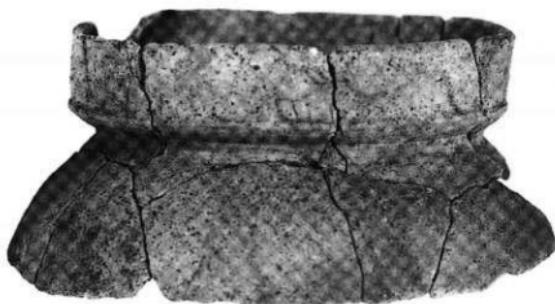
No.95



No.96



No.97



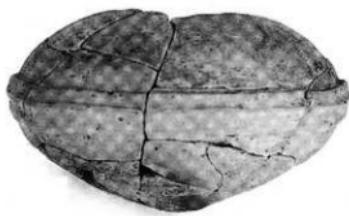
No.98



No.99 SK474



No.100 SK474

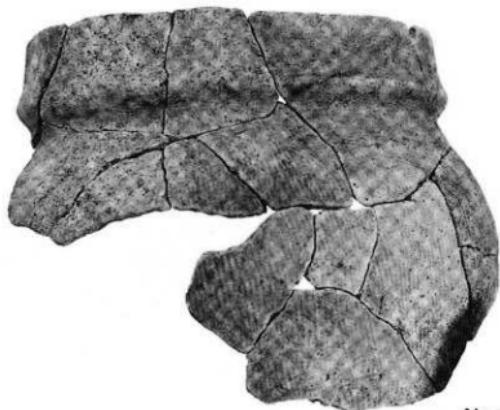


No.101 SK474

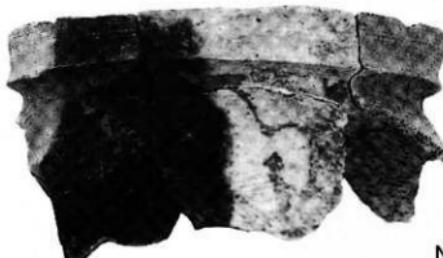


No.102 SK474

図版
第二十



No.103 SK474



No.104 SK474

No.106 SK474→



No.105 SK474



No.107 SK474



No.108 SK458



No.109 SK458

報告書抄録

ふりがな	ふたくちあぶらめんいせき だい2じはっくつちょうさかいほう						
書名	二口油免遺跡 第Ⅱ次発掘調査概報						
副書名	土地区画整理事業に係る調査						
卷次							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財報告書						
シリーズ番号	第16集						
編集者名	中井英策						
編集機関	大門町教育委員会						
所在地	富山県射水郡大門町二口1081						
発行機関	大門町教育委員会						
所在地	富山県射水郡大門町二口1081						
発行年月日	平成10年3月						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
二口油免 遺跡	富山県 射水郡 大門町 二口		36° 43' 21"	137° 03' 29"	平成9年 7月10日 ～ 平成10年 3月19日	約4,000m ²	区画整理事業に伴う調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
二口油免 遺跡	集落	弥生 古代 中世	弥生聚穴式住居 土壙 堀立柱建物 井戸	弥生上器 碧玉管玉 須恵器・土師器 石製品・木製品	弥生時代後期の玉造工房 集落に伴う周溝		

二口油免遺跡 第Ⅱ次調査

1998年 3月

編集・発行 富山県射水郡大門町教育委員会

〒939-02 富山県射水郡大門町二口1081

電話(0766)52-6964

印刷 株式会社 立業社高岡

